花ノ宮町限定☆美少女ヒーロー

光太朗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

花ノ宮町限定☆美少女ヒーロー

【Ｎコード】

Ｎ９９０８Ｘ

【作者名】

光太朗

【あらすじ】

遠い昔、なりたいものにならせてあげると、仮面の男がいった。ヒーローになりたいと、少女は願った。そして十二年ぶりに、懐かしの町に帰ってきた少女は……！？　勢い重視のファンタジッククライトコメディ☆　〜〜１１月中に完結予定です。

ｓｃｅｎｅ＿０　「魔法が使えるんだ」

燕尾服に黒い仮面。
見るからに怪しい男が、公園で一人遊ぶ少女に近づいていく。
「やあ、お嬢ちゃん。かわいいね」
少女は砂場に座り込んで、ファミリーレストランごっこをしている最中だった。お待たせしました、ハンバーグでございます。砂の塊を並べていく。
「お名前は、なんていうのかな」
少女は顔を上げた。男を一瞥し、はきはきと答える。
「あのね、おじちゃん。ひとに名前を聞くときは、まず自分が名乗らないといけないんだよ」
目線を戻し、ハンバーグ作りを再開する。男は一瞬沈黙し、咳払いをした。
遠くを見て、目を細める。
「名、か……。そうだね。ではお兄さんのことは、美しき闇商人、Ｊ・Ｊと呼んでもらおうか」
さりげなく、お兄さんを強調した。少女は首をかしげる。
「うつくしきやみしょうにん、じぇいじぇい？」
大きな目を、何度もまたたかせた。
「うつくしいの？」
「……見てわかるだろう、お嬢ちゃん」
Ｊ・Ｊと名乗った仮面の男は、怒りを堪えるように、それでも甘い声を取り繕って、いう。
「とっても、美しいじゃないか」
「そうかなあ。そんなことないと思うけどなあ」
少女は全力で正直だった。Ｊ・Ｊは少女に背を向けて、こめかみを押さえる。十数秒で復活すると、少女に向き直り、渾身の笑みを

披露した。
「それで、お嬢ちゃん。お名前は？」
「あたしは、矢中ナノカ。南花幼稚園真ん中組の五歳だよ。好きな食べ物はこしあんのおまんじゅうとレーズンバターサンドで、嫌いな食べ物は……」
「いや、いいよ、わかった」
少女、矢中ナノカは唇をとがらせた。まだまだこれからだったのに。
Ｊ・Ｊは砂場の脇に膝をつき、ナノカの頭をそっと撫でる。
「お兄さんはね、魔法が使えるんだ。ナノカちゃん、君にはなりたいものがあるだろう。お兄さんの特別な魔法で、ナノカちゃんのなりたいものに、ならせてあげるよ」
「なりたいもの……！」
ナノカは、目を輝かせた。
なりたいものは、たくさんある。ファミリーレストランの綺麗な店員、優しい幼稚園の先生、おしゃれなママにだってなりたい。
しかしナノカは、なれるものとなれないものがあることを、知っていた。世の中にはフィクションがあるということを、理解している五歳児だった。
だからこそ、迷わなかった。
毎週日曜日の朝、兄と楽しみに見ているテレビアニメ。それに、兄がやっているゲームや、借りてくるＤＶＤの世界。
本当の意味でなりたいものは、一つだけだ。
「あたし、この町の平和を守る、ヒーローになりたい！」
「いいだろう」
Ｊ・Ｊの黒い目が、仮面越しに光った。白いグローブをつけた手を、そっと差し伸べる。
「その代わり、心をひとつ、いただくよ」
その手が、ナノカの胸元をつかんだ。そこから薄暗い煙のようなものが生まれ、ナノカの小さな身体を浸食していく。じわりじわり

と、まるで心臓そのものをえぐり出そうとするように。
やがて、ナノカの胸から、小さな光が飛び出した。それは輝きながら浮遊し、自らＪ・Ｊの口の中に飛び込んでいく。
ごくりと音をたてて、Ｊ・Ｊは光を呑み込んだ。
「ああ、美味だ」
目を細め、満足そうに唇の両端を上げる。
ナノカは悲鳴をあげそうになったが、痛みはなかった。おそるおそる胸を押さえ、シャツをまくりあげて直に確認する。傷があるわけでもない。
「いまの、なに？　なにをしたの？」
顔を上げ、ナノカは動きを止めた。
砂場の向こう、象の形の滑り台。シーソーと鉄棒。そこから先はもう道路で、住宅街が続く。
振り返ると、ベンチ。それだけだ。
たったいままでいたはずの男が、姿を消していた。
「……あれ？」
そんなはずはなかった。それとも、幻を見ていたのだろうか。遊んでいたつもりが、いつのまにか眠ってしまって、夢を見ていたのだろうか。
ナノカの名を呼んで、道の向こうから、兄が駆けてくる。手に提げているビニル袋には、兄とナノカ、二人分のあんまんが入っているはずだった。
ひとりで待っていたのはほんの少し、五分にも満たない間だ。
「――とても良い取り引きだったよ、矢中ナノカ」
声だけが降りてきて、しそしそれもすぐに、風にかき消された。

scene_1 「嬉しいんだよ」

「ただいま、花ノ宮町――！」
窓を開け放ち、矢中ナノカは叫んだ。
思い切り息を吸い込んで、もったいなくてぜんぶを飲み込む。嬉しさに足をばたつかせ、顔を左右に思い切り振った。ツインテールがぐるんぐるん揺れる。
「幸せ――！」
とりあえず、思いの丈を叫ぶ。せー、せー、せー……住宅街に、声がこだましたような気がした。
「こら、ナノカ。ご近所迷惑だぞ。『ただいま』と『幸せ』は一日一回までだっていっただろう。昨日から何回いってると思ってるんだ」
フリルエプロン姿の矢中ヒロシが、おたまを片手に小言をいう。ナノカはえへへと笑った。上目づかいに、親愛なる兄を見る。
「だって、嬉しいんだよ。今日から学校だよ？　あたし、興奮しすぎて噴火しちゃうかも」
媚びているわけではなく、身長差からそういった目線になっただけだ。しかしヒロシは、額を押さえて頬を染めた。
「やばいな……！　なんだそのかわいさは！　ナノカは本当にかわいいな！　ようしいいぞ、噴火でもなんでもすればいいとお兄ちゃんは思うぞ！」
ヒロシの正体は兄バカだ。特大の兄バカだ。
「お兄ちゃんのそういうバカっぽいところ、大好き！」
心の底からナノカがいう。これはこれで、妹バカだ。
二人は右手をあげて、歩み寄った。ガシッと腕を組み、見つめ合って、うなずき合う。一呼吸分間を空けて、同時に天井を見上げた。
「愛！」

「こそ！」
「「正義！」」
声をそろえた。要するに、兄妹でバカなのだ。
「いつまでもこうしていたいが、ナノカ、そろそろ準備を始めてもいいころだな。トイレは行ったか？　ハンカチ持ったか？　まあ、まだ出るには少しだけ早いが……――あ、待って待って、そのかわいい制服姿、写真に撮るからね」
「もう、お兄ちゃん。あたし、余裕持って早く行きたいよ。なんでギリギリまで待つの？」
一眼レフカメラで妹の写真をとりまくる兄にかまわず、カバンを肩にかけながら、ナノカが問う。
「いやあ、花ノ宮高校の制服はいいなあ。スカートもほどよく短く、それでいてお嬢様っぽさを損なわない……！　帰ってこれてよかったなあ、ナノカ」
しかし、どうでもいい返答がよこされた。ナノカは頬を膨らませる。
「お兄ちゃん！」
「おお、いいぞ、いいぞ！　その顔はポイント高いぞ！」
「変態」
覚めた声で、ナノカは告げた。
それはまるで、海岸ぎりぎりまで押し寄せようとしてきた波が、さーっと一秒で沖まで引いて、ドロンと消えていくかのようだった。
ヒロシは動きを止め、黙る。
静かにカメラのレンズにカバーをはめ込んで、棚に置いた。
「悪かった」
頭を下げた。ナノカはうなずく。
「ねえ、もう行っていいでしょ？　準備はとっくにできてるよ。朝ご飯だって、結局食べられなかったしさ。転校初日におなか鳴っちゃったら、恥ずかしいよ」
「わかってないなあ。いいか、もう少しだ。ギリギリまで、待て」

ヒロシはニヤリと笑った。
「ギリギリアウトのタイミングで、食パンをくわえて走り出せ！忘れるな、合い言葉は、『遅刻、遅刻ぅ』だからな！」
「ギリギリアウトなの？　やだよ、そんなの！」
ナノカは腕時計を見た。すでにギリギリだ。セーフなのかアウトなのか、慣れないナノカには判断すらつかない。
「お兄ちゃんの、バカ！」
「あ、待てナノカ、朝メシ！」
「もー！」
ナノカはテーブルの上に用意されていた食パンをひっつかむ。これでは兄の思いどおりだと知りながらも、口にくわえた。革靴にニーハイソックスの足を入れて、ドアを開けて走り出す。
「行ってきます――！」
アパートの階段を駆け下りると、全速力で高校へ向かった。
五歳まで住んでいた、懐かしの町。以前から憧れだった、花ノ宮高校。
やっと、そこの生徒になれる日が、やってきたのだ。
「遅刻、遅刻――！」
意図せず、叫んでしまう。叫んでからしまったと思ったが、遅かった。走りながら振り返ると、ドアの前で、ヒロシがしっかりとこちらを見ていた。親指を空に向けている。その口が動いた。もはや聞こえないが、「グッジョブ」といっているのは明白だ。
「まったくもう！」
しかし、文句をいっている場合でもない。ナノカは腕時計を確認した。八時十八分。普通に歩いて、高校までは二十分ほどかかる。走ればその半分で着くのだろうか。走って行ったことはないので、わからない。
花ノ宮高校を訪れたのは、三回だけだ。転入手続きを目的としていたため、うち二回は母の運転する車だった。以前はこの町に住んでいたとはいっても、十二年も前のことではあてにならない。見慣

れた景色があるような気もするが、気のせいだといってしまえばそれまでという程度だ。
近道など、知るよしもなかった。ほかに方法はないものかと思いつつ、馬鹿正直に信号が青に変わるのを待ち、懸命に走る。
「あと少し！」
ナノカは、全速力で走り続ける。
最後の角を曲がり、正門前にたどり着き――
――足を止めた。
がくりと、膝をつく。
アウトだった。
自分の背よりも高い門は、しっかりと閉ざされていた。
「ああ……」
なんということだ。転校初日に、遅刻してしまった。
兄を恨むしかない。
「どうしよう……」
門を飛び越える。
塀をよじ登る。
どちらも不可能ではなさそうだが、そんなことをして良いものだろうか。
絶望的な気持ちで、顔を上げる。いかにも片田舎らしい広い敷地に、どんと構える花ノ宮高校。門の向こうには、ドラマなどでよく見るような長い長い桜並木が続いている。さらに遠くに、古い校舎が二つ。レトロな時計台が、こちらを見下ろしている。
「あれ？」
ナノカは、まばたきをした。まだ、八時二十分を少しまわったところだ。腕時計で確認するが、示している時刻は同じ。
おかしい。家を出るときに、見間違えたのだろうか。まさか、五分かそこらでここまでたどり着けるわけもない。
それに、門が閉まっているのもわからない。八時三十分までに着けば、セーフのはずだった。

「おやすみ……？」
そんなはずはないと思いつつ、つぶやく。
「そんなはずがないでしょう」
しかし、第三者によってしっかりとつっこまれた。
不機嫌そのものの、男の声。
「もう五月だというのに、まだこんな時刻に来る生徒がいたとは。八時二十分までに登校し、すみやかに一限の準備をすること。生徒会の定めた鉄の掟を、知らないとはいわせませんよ」
男は、眼鏡を人差し指で押さえるようにして、高圧的にいった。門の向こう側から、冷ややかにナノカを見下ろしてくる。
花ノ宮高校の制服を着ている。教師というわけではないようだが、教師よりも偉そうだ。
「知らないよ」
ナノカは、正直にいった。事前説明の際にも、そのようなことをいわれた覚えはない。
「ねえ、入れてよ。これって、まだ遅刻ってわけじゃないんでしょ？」
「遅刻です」
きっぱりと断言される。必死に走って、しかも時計を見る限りでは間に合っている分だけ、納得がいかない。ナノカは両の拳を握りしめた。
「なんで！　八時半までに着けばいいんでしょ！　そういう決まりがあったんならあたしが悪かったけど、知らなかったんだからしょうがないじゃん！」
怒りのままに、声を荒らげる。男は眉根を寄せ、手を顎に当てた。
「知らなかった？」
不可解だといわんばかりに、じろじろとナノカを見る。それから、もしかしてとつぶやいた。
「あなたは、今日から転校してきた……」
「こんなのって、横暴だよ！　正義の道に反するよ！　頭に、きた

――――！」
男がなにかをいいかけたようだったが、ナノカの耳には届かなかった。完全に頭に血が上り、周囲が見えなくなっていた。
ガシリと、両手で門をつかむ。
「うにゅにゅにゅにゅ……っ！」
冗談のつもりではなかった。どういうわけか、できるという気がしていた。
いまなら、立ちふさがる鉄の門を、持ち上げて放り投げてぐしゃぐしゃにしてポイすることが可能だと、可能に違いないと、確信があった。
「強、行、突、破――！」
ナノカが十人横に並んでも、まだ足りないのではないかという巨大な鉄門が、ぎしぎしと音をたてる。握りしめている部分は熱を帯び、指が食い込んだ。まるでマシュマロのように。
「ちょ……な、なにを……？」
眼鏡の男が、数歩下がる。震える手で眼鏡を持ち上げた。おそらく、これからなにが起こるのかを察したのだろう。
しかしナノカには、止まる気はなかった。時間内に校門を越えることが、いまの彼女にとってすべてだった。
「うりゃあ――！」
とうとう、鉄門すべてが、レールから引きはがされた。
ナノカはそれを、両手でえいやと持ち上げる。砂と、コンクリートのかけらのようなものが、ぱらぱらと落ちる。
「てい！」
さらにそれを、頭上へ向かって放り投げた。ナノカは空を見上げ、タイミングを見計らって跳躍した。空中で、しかも片手で鉄門をキャッチして、手紙を書き間違えたときのように、ぐしゃぐしゃと丸めていく。正確には、ものすごい力での圧縮だ。空気の隙間を一切なくし、鉄そのものの密度を高め、できる限りに小さく。
「――は！」

そして、最終的には、だれもいないグラウンドめがけて、ポイした。
ズシン――地面が揺れる。
ナノカは華麗に着地した。
ツインテールが、ワンテンポ遅れてふわりと落ちる。
時計を見た。八時二十五分。
「セーフ！」
ごく機嫌良く親指を立てる。これでなんの問題もない。
「じゃ、あたし、行くね」
もはや、ナノカの行く手を阻むものはなかった。ナノカは軽い足取りで、男の横を通り過ぎる。情けなくも、男は尻餅をついていた。眼鏡がズレている。
「ちょ……ちょっと、待っ……」
男は手を伸ばしかけたが、結局は下ろした。
ナノカはそのまま、カバンを前後に振りつつ、スキップで校舎へと入っていった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9908x/

花ノ宮町限定☆美少女ヒーロー

2011年10月28日15時19分発行